

犬を飼う時の ルールとマナー



目 次

I. 飼い主として守るべきこと

1. 犬の登録と狂犬病予防注射をうけましょう 1
2. ㊦ マークをはりましょう（飼養表示）..... 1
3. 放し飼いはやめましょう 1
4. 人の迷惑にならないように飼いましょう 1
5. 誤って人をかんだら 2
6. どうしても飼えなくなったら 2
7. 犬にも家族計画をしましょう 2
8. 生涯愛情と責任を持って飼いましょう 2

II. 犬の特性について

1. 本 能 3
2. 習 性 4
3. 生 理 5

III. 犬の食事の与え方

1. 犬の食事 6
2. 食事の与え方 7
3. 水の与え方 8

IV. 犬の健康管理

1. 生活環境への思いやり 9
2. 日常の手入れ 9
3. 運 動 11
4. 病気について 12

V. 犬のしつけ

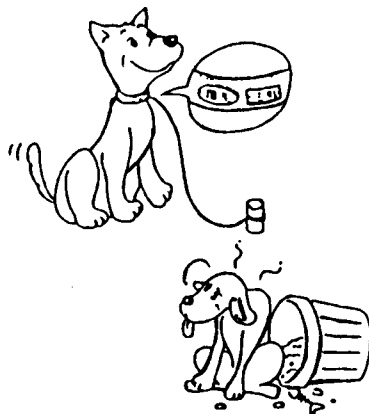
1. しつけを始めるときの心がまえ 15
2. いろいろなしつけ 16~18

I. 飼い主として守るべきこと

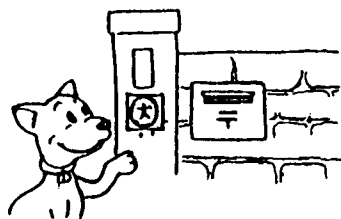
1. 犬の登録と狂犬病予防注射をうけましょう

生後3ヶ月以上の犬は、生涯1回の登録と毎年1回の予防注射を必ず受けさせましょう。

犬の鑑札と注射済票は必ず首輪につけましょう。なお、登録した犬が死亡したり、所有者等の変更がある場合は市町村役場に届出する必要があります。



2. 犬マークをはりましょう (飼養表示)



郵便や新聞を配達する人や訪問客が不意にほえられたり、咬みつかれたりすることがあります。見えやすいところへ犬マークをはりましょう。

3. 放し飼いをやめましょう

はじめが大切！子犬のときからつないで飼うくせをつけましょう。犬を放すとよその家の庭や畑を荒らしたり、人をかんだりして多くの人に迷惑をかけます。また、犬が交通事故にあったり、病気をうつされたりします。散歩は、口輪をして引き綱につないでしましょう。



4. 人の迷惑にならないように飼いましょう

犬を飼えば、となり近所とのかかわりがたくさんできます。他人に迷惑をかけるよう「しつけ」と「心配り」が必要です。犬舎周辺の清掃は飼い主が責任を持ってしましょう。また、人が通るような場所に犬をつないではいけません。



5. 誤って人をかんだら

飼い主は、**保健所**へ必ず咬傷届けをしましょう。そして、獣医師のもとで**狂犬病**の検診を受けさせてください。



6. どうしても飼えなくなったら



捨てることは、**野良犬**をつくる一番の原因になり、多くの人達はもちろん、犬にとっても大変迷惑なことです。飼えなくなった場合は、新しい飼い主をさがしましょう。新しい飼い主が見つからないときは、**最寄りの保健所**又は、**市町村役場**へ相談しましょう。

7. 犬にも家族計画をしましょう

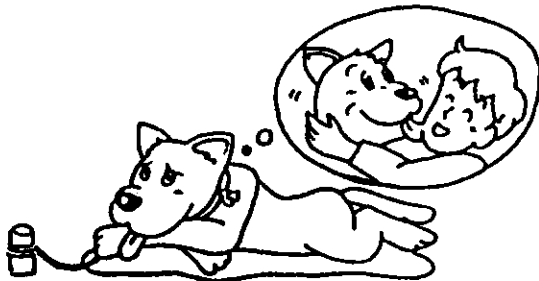
子犬が生まれるとこまるなら、初めから生ませないことです。捨て犬、野良犬をつくらないために「**去勢手術**」「**避妊手術**」をしましょう。

※最寄りの動物病院にご相談ください。



8. 生涯愛情と責任を持って飼いましょう

犬は、犬種にもよりますが、約15年位生きます。初めのうちだけチヤホヤ可愛がり、しばらくすると放りっぱなしでは**犬を飼う資格**はありません。



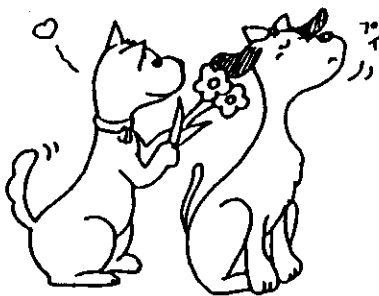
Ⅱ. 犬の特性について

1. 本能

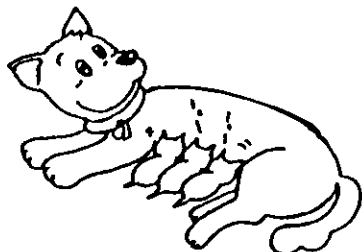
本能とは、動物が生まれつき持っている行動様式です。その主なものは、次のようなものがあります。

(1) 子孫を残し、絶やさないための本能 (生殖本能)

犬は繁殖力の旺盛な動物です。よく面倒を見てやれば可愛らしい子犬が生まれるでしょう。発情期には遠吠えやけんかなどで、苦情の原因になることもあります。子を生ませることを望まない場合は、避妊手術を受けさせましょう。



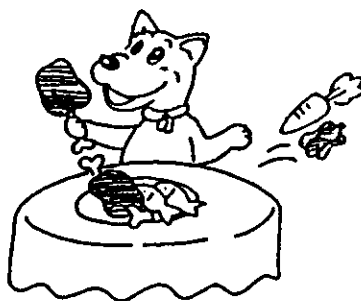
(2) 子供を守り、育てる本能 (母性本能)



ほ乳中の母犬は乳をあたえたり、お尻をなめて排せつの世話をしたりで子供にかかりきりです。この時期は、母犬は子供を守ろうとする意識が強く、不用意に子犬に手をだしたりすると、危険なことがあります。

(3) 成長と生命を維持するための本能 (採食本能)

生まれるとすぐ母犬の乳首をまさぐり吸いつきます。もともと肉食動物であった犬は、動物性の食べ物を好み、食べ物の適不適を見分けます。



(4) 自分の身を守る本能 (防衛本能)



なわばりを侵されたり、危害を加えられたとき、またはそのおそれを感じる時は、逃げて身を守るか、逆に攻勢に転じます。急におどかす、いじめる、けしかける、食事中に手を出すなどはやめましょう。

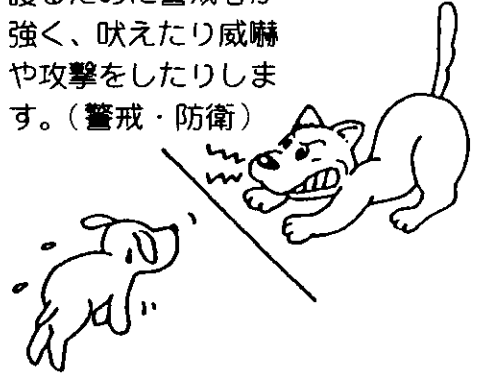
2. 習 性

習性とは、日常の習慣によってつくられた性質で、犬によって個体差がかなりありますが、一般的に次のようなものがあります。

- (1) 飼い主が主導的対応をしていれば、犬は愛着を持ち喜んで従属的な行動をとります。
(服従)



- (2) 自分の棲む縄張りをつくります。それを護るために警戒心が強く、吠えたり威嚇や攻撃をしたりします。(警戒・防衛)



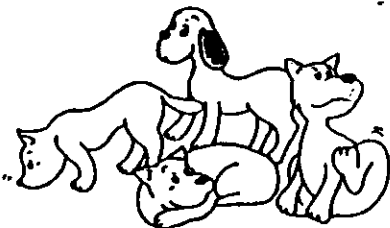
- (3) 動くもの、逃げる動物をおいします。突然走り出したりすると、人でも咬捕しようとしします。(追跡・狩猟)



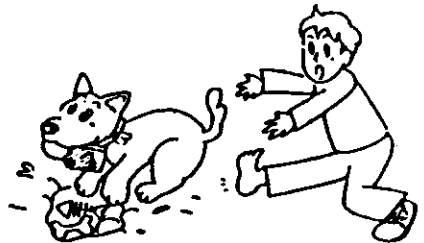
- (4) 臭いや音に敏感です。嗅覚を利用し獲物を探し出そうとする意欲。犯人の追跡捜査にも利用しています。(捜索)



- (5) 群をつくり行動するのが好みます。群の統制をとる順位制度があります。犬の言いなりを対応していると権勢本能が強化され問題行動の犬になります。(群棲・権勢)



- (6) 穴を掘ったり、獲物やボールをくわえて巣に運びます。



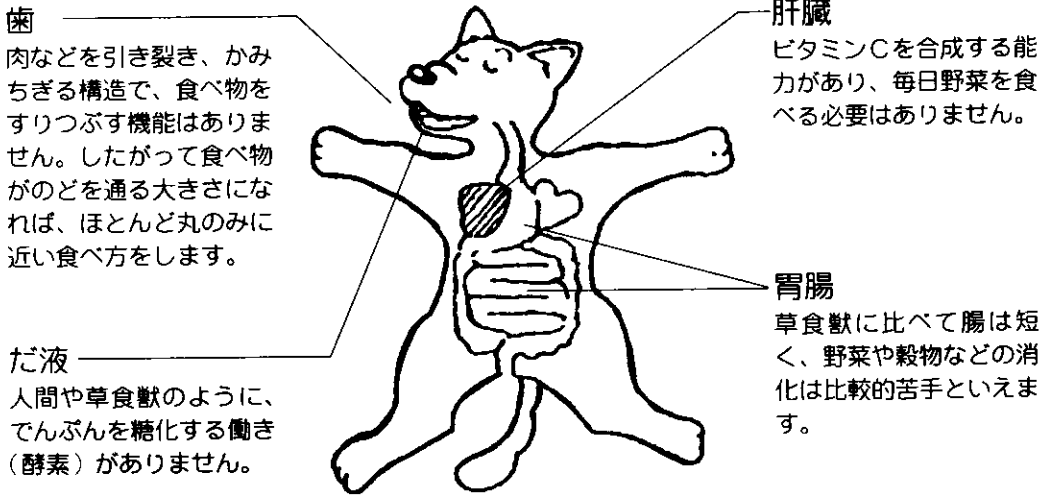
- (7) 愛情の独占欲があり、やきもちやきです。



3. 生 理

(1) 犬は元来肉食動物です。

長い間、人間に飼い慣らされた結果、本来の肉食から雑食でも生活できるようになってきていますが、どちらかといえば、穀類、野菜よりも肉類、魚類などの動物性食品を好んで食べます。



(2) 歯と毛の生えかわり

乳歯は生後3週間で生え始め、1ヶ月で生えそろい、4～5ヶ月になると永久歯に生えかわり始めます。この時期に体毛もうぶ毛からおとなの毛にかわります。

(3) 発情とその周期、妊娠期間

犬種によりことなりますが平均して8～14ヶ月で最初の発情がきて、以後は約6ヶ月間隔で年2回あります。雄犬の場合は、特定の発情期はなく、雌犬に合わせて行動します。妊娠期間は約60日です。

(4) 人の年齢と犬の年齢の比較

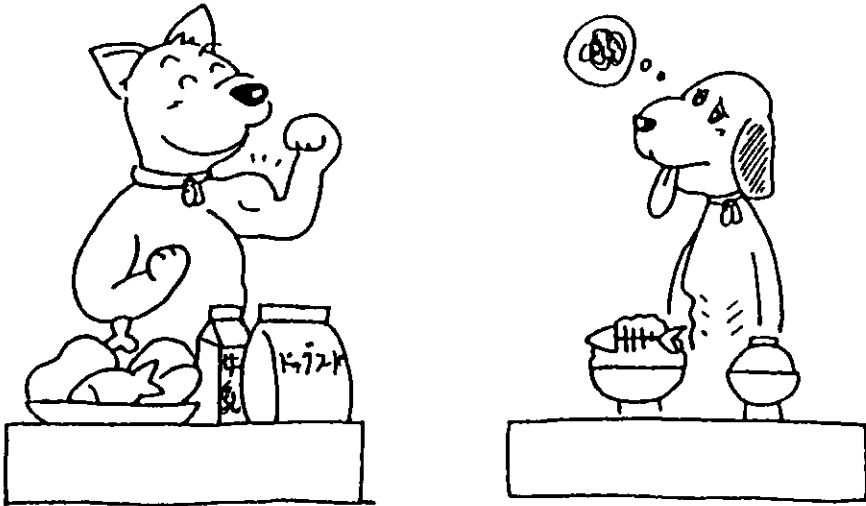
犬の年齢を人と比較する方法はいろいろありますが、その一例を次に示します。

犬の年齢	3ヶ月	6ヶ月	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	15歳	18歳	20歳
人の年齢	5歳	12歳	18歳	25歳	30歳	35歳	40歳	45歳	50歳	55歳	60歳	65歳	90歳	105歳	120歳

Ⅲ．犬の食事の与え方

1. 犬の食事

前にもふれましたが、犬はもともと肉食の動物です。しかし、肉食獣だからといって肉や魚ばかりを与えればよいというわけではありません。犬を健康に育てる為には栄養のバランスを考えて、**毎日規則正しく**与えることが大切です。



(1) 偏食にならないように

食事の必要成分には次のようなものがあります。

たんぱく質（肉類、卵、チーズ、牛乳など）

炭水化物（米麦類、パン、うどん、マカロニなど）

ミネラル（無機塩類、特にカルシウム、骨その他）

ビタミン（各種食品に含まれるA～E各種）

単一の食品で、これらのすべてを満たすものはないわけですから、適当に組み合わせてバランスよく与えましょう。いつも残飯にみそ汁だけとか、その逆に、好物だけに偏りすぎる与え方は考えものです。

(2) 味付けはごく薄めに

人間並の味付けをした食事が続くと変調をきたします。その1/3以下の塩加減が適当と思ってください。肉や魚を与えるときは塩、コショウなどの味付けの必要はありません。また、かしゃあんこ類など、甘いものを与えないようにしましょう。骨格や歯を悪くするだけでなく、病気の誘引にもなります。

(3) ドッグフードの利用

最近ではメーカーの研究もすすみ、必要な栄養分が配合され、犬の好みも考慮されています。いろいろなタイプがあり、種類も豊富ですから、適当なものを選ばれるとよいでしょう。

次にその主なものをあげてみます。

○犬用ミルク

牛乳では親犬の母乳と成分が異なるため、下痢をしたり、栄養素が不足したりする場合があります。組成が犬の母乳に近くつくられています。

○缶詰類、半生パックもの

主として肉類、魚類で、そのまま、またはえさの一部にまぜて与えるのに適当で、保存ができます。

○ドライフード

乾燥した粒状のもので、そのまま食器に盛り与えます。またお湯などにしばらく浸し、柔らかくふくらんでから与える方法もあります。なお、離乳食、幼犬用、病犬用など、いろいろな種類があります。

2. 食事の与え方

毎日規則正しい時間に、決まった量を与えることは、犬の健康やしつけのためにも大切なことです。さらに、食事の食べ具合や便の様子で犬の健康状態をチェックしましょう。



食事の一口メモ

犬に与えてはいけないもの

●タマネギ

タマネギ中毒(貧血など)を起こします。調理したもので与えてはいけません。

●鶏の骨・かたい魚の骨

骨が胃や腸を傷つけることがあります。牛の骨などを与えましょう。

食事の回数は、成犬では1日1～2回が適当です。普通は朝夕の戸外運動が終わって15分位あとがよいでしょう。



食事の一口メモ

犬の1日の食事回数

2～4カ月齢：3～4回

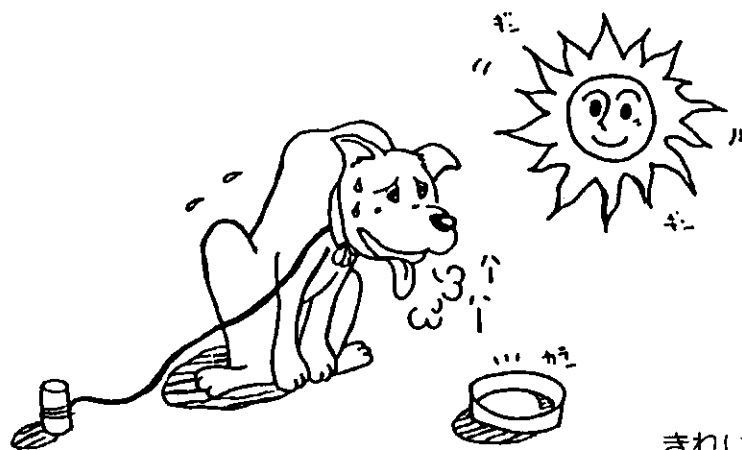
5～11カ月齢：2～3回

12カ月齢以上：1～2回

食事の量は、喜んで一気に食べ、空の食器をなめ、与えればもう少し食べるなど思われる程度が適量です。要は発育や肉付き、食欲、それに便の状態などをにらみ合わせて増減し、あなたの愛犬に適したやり方を検討してください。食べ残した時はそのまま放置しないで、一旦引き上げるようにしましょう。

3. 水の与え方

水はいつでも欲しい時に飲めるように、きれいな水を一定の場所に用意してやりましょう。水を忘れてたり、与えないのは虐待につながります。



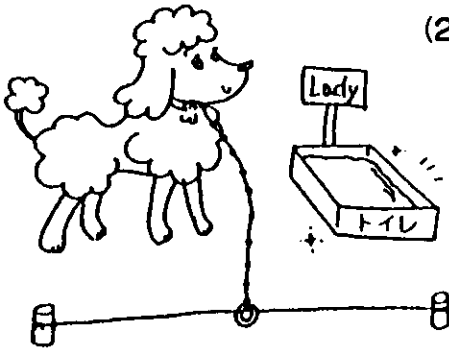
きれいな水をいつでも飲めるように！

IV . 犬の健康管理

1. 生活環境への思いやり

(1) 気候による配慮

雨などにぬれないように、また、季節ごとに日光や風の当たり具合などを配慮してやることも大切です。暑さや寒さで犬が弱らないように、飼育場所の工夫などをして、快適な環境をつくってやりましょう。



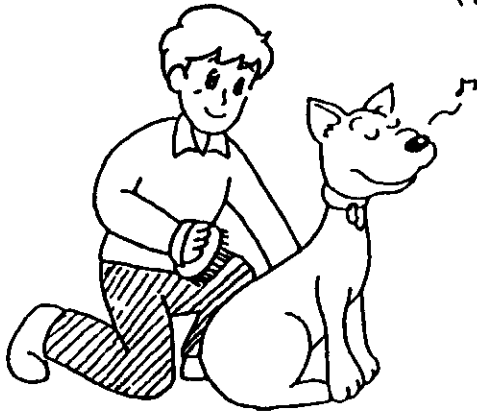
(2) 飼育場所の清潔

犬はきれい好きです。犬舎周辺を清潔にしておかないと、ノミやハエなどが発生し、犬も病気にかかりやすくなります。飼育場所の清掃や害虫の駆除は、できるだけこまめにしてやりましょう。

2. 日常の手入れ

犬も人間と同じように病気にかかります。日頃から犬とのスキンシップを大切にし、異常も早めに発見できるように心がけましょう。





(1) ブラシとくしできれいに

皮膚の血行をよくし、フケや汚れ脱毛を取り除き、被毛のツヤをよくします。夏毛・冬毛などの換毛期には特に念入りにしましょう。ブラッシングした後は、毛等、汚物の始末を忘れずにしましょう。

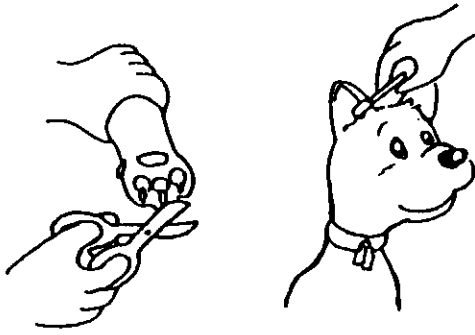
(2) ときどきは入浴させてサツパリと石けん分が残らないようよくすすぎ、風邪をひかないようにタオル、ドライヤーなどを使って手早く乾かしてやりましょう。また、蒸したタオルでふいたり、ドライシャンプーを使う方法もあり、特に入浴させなくても、こまめに手入れをして清潔を保っている愛犬家もいます。



(3) ノミ、ダニ、シラミ、の駆除法

ノミとり粉、スプレー式殺虫剤、殺虫剤入りの首輪、殺虫剤の入ったシャンプーなどが市販されています。これらを使用すると便利です。ノミやダニは皮膚病などの病因にもなるので必ず駆除をしてやりましょう。





(4) ツメ切り、耳の掃除

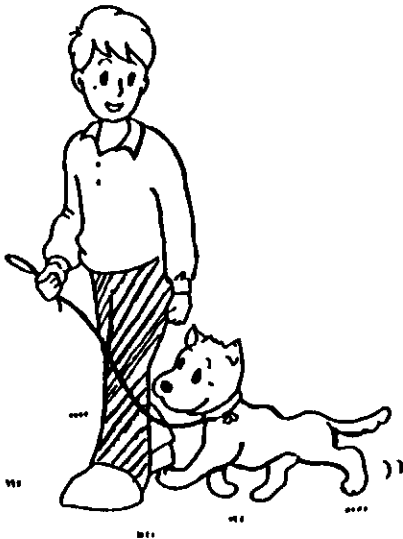
室内で飼ったり、運動不足の犬の場合、ツメがのび過ぎになることがあります。のび過ぎていれば深ツメに注意して手入れをしてやりましょう。また、耳に異常があるときは、かゆがって首を振ったり、足でかこうとします。耳の病気にかからないよう、ときどき掃除をしてやってください。

3. 運 動

運動は飼い主と犬との交流のもっとも大事な時間です。お互いの健康増進のための日課として実行しましょう。

(1) 毎日の運動

犬舎に入れられたり、つながれたりしている犬は、毎日朝晩20~30分位引き綱を使って運動をさせる必要があります。室内や、囲いのある広い運動場で自由に動きまわっている犬でも、1日に1回は引き運動につれていきましょう。



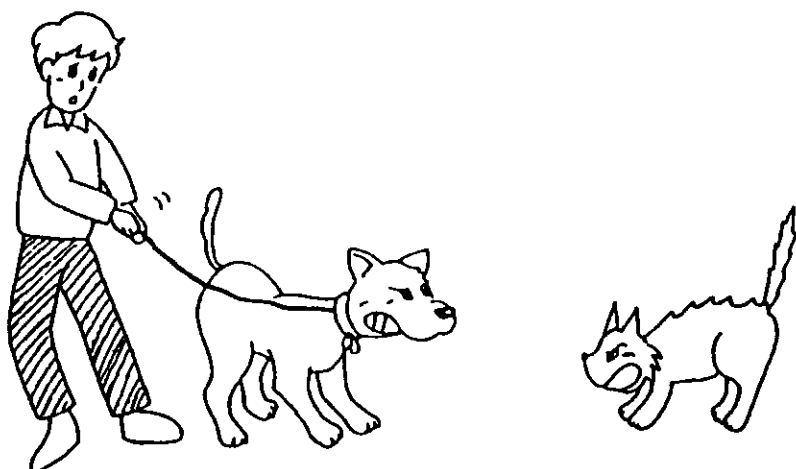
運動はその犬の種類や年齢に合わせて、規則正しく行うことが大切です。犬が喜んで出かけ、疲れの見えない程度を一応の目安として、距離や時間を決めるとよいでしょう。幼犬や老犬では過度にならないようにし、特に病犬では無理のないようにいたわってやりましょう。

(2) 運動させるときに気をつけたいこと

運動に排せつはつきものです。他人の迷惑にならないような場所を選んでさせ、フンのあと始末をするのは飼い主の責任です。フン取り器などの市販品もあるようですが、ビニール袋とはしなどでも間にあいます。必ず携



帯しましょう。また、運動をさせるときは、交通量の多い所、子供の遊び場や、通勤通学などの時間帯を避けるように心がけ、犬が事故を起こさないように気をつけましょう。引き運動をさせる人が、その犬に引きずられたり、とっさのときに抑えきれないようでは困ります。十分に犬を抑制できる者が運動をさせましょう。



4. 病気について

(1) 病気の見つけ方と見分け方

犬は言葉がしゃべれません。犬の健康状態を知るには、日頃からの手入れや、運動、大小便、食欲などの状態に気をくばっておく必要があります。どうも様子がおかしいと感じたとき“どこにどのような異常があるか”をよく観察し、獣医師の診断をうけるなど飼い主としての義務をはたしましょう。

健康であるかどうかの目安として、13ページの表を参考にしてください。

ポイント	良い状態	悪い状態
元 気	活動的にはねまわる	不活発で沈んでいる
食 欲	おう盛	減退もしくはなし
鼻	湿っている	乾いている、鼻汁を出す
せ き	しない	連続してせきをする
目	澄んでいる	にごり、充血、目やにがある
口 内 色	くちびる、歯ぐきの血色がよい	白っぽい、青白い
口 臭	悪臭がない	魚の腐ったような臭い
背 部	のびのびしている	背をまるめる
排 便	やわらかくなく、かたすぎない	下痢、便秘、血便、寄生虫
尿	澄んでいる	血尿、のう尿
お う 吐	しない	食後にもどす
披 毛	やわらかく、つやがある	つやがなく、カサカサ
皮 膚	弾力があり、つやがある	つやがなく、カサカサ

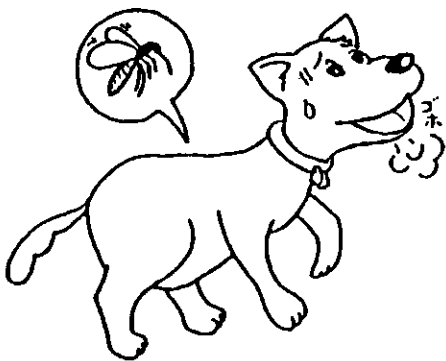
(2) 犬の主な病気と予防（予防にまさる治療なし）

○ウイルス性伝染病

ジステンパー、伝染性肝炎、パルボウイルス感染症などは、ウイルスによっておこる伝染病で、発病すれば犬の命にかかわるような怖い病気です。予防には、それぞれの病気に有効なワクチンがあります。



蚊は犬の大敵です



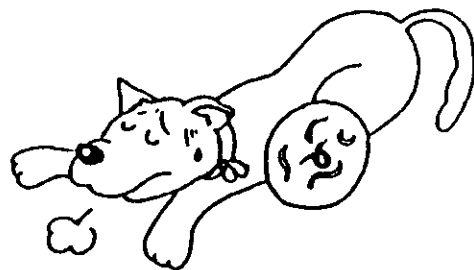
○フィラリア症

蚊の吸血によって媒介される病気で、ソーマンのような虫が心臓に寄生します。初期にはほとんど症状を現しませんが、重症になるとせきをしたり、腹水がたまるなどの症状を起こし治療もできなくなって死んでしまいます。予防には、まず蚊にさされないようにしてやることですが、内服薬を使う方法もあります。また、血液検査で早期に発見すれば治療もできるので、定期的に獣医師の検査や指示を受けるとよいでしょう。

○消化器の寄生虫病

寄生虫には、回虫、鉤虫（十二指腸虫）、鞭虫、条虫などの種類があり、一般に消化障害や貧血などを起こし、発育不良になったり、他の病気に対する抵抗力を弱めたりします。予防には、犬の生活環境をいつも清潔にしておくことが第一です。便は放っておかず速やかに取り除くようにしましょう。また、獣医師の定期的な検査や指示を受けましょう。

素人判断での駆虫・投薬はやめましょう



○皮膚

皮膚病にもいくつかの種類がありますが、ノミなどの寄生虫や細菌、カビなどに感染し、湿しんや脱毛などの症状を起こします。犬の皮膚や被毛、そして飼育場所を清潔にし、他の病犬と接触させないようにすれば予防できます。

○狂犬病

狂犬病は犬をはじめ、**人やその他の動物にも感染し**、現在の医療技術でも治療方法はなく、発病すればまず命の助からない恐ろしい伝染病です。日本では1956年（昭和31年）以来発生していませんが、外国での発生例はまだ数多くあり、いつ、我が国に入ってこないとも限りません。このため**飼い主の登録と狂犬病予防注射が義務**づけられています。

V. 犬のしつけ

1. しつけを始めるときの心がまえ

世の中には、犬の好きな人達ばかりではありません。他人に迷惑や危害を及ぼすことのないよう、十分な心くぼりと正しいしつけが大切です。

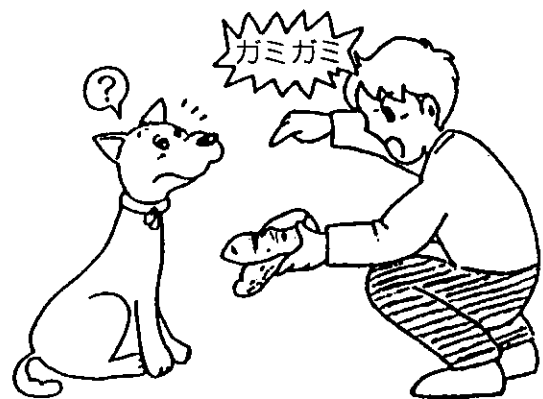
(1) しつけを始める時期

しつけをうまく成功させるためには、子犬のときから大切です。成犬になるとしつけは難しくなり、悪いくせがついてしまったあとではなかなか直すことはできません。幼い子犬は無理ですが、子犬が家族に十分なついて、**生後2～3カ月頃から始め、本格的には5カ月頃からしつけるのがよいでしょう。**



(2) しつけのタイミング

制止のタイミングはいけな**いことをした直後**、または**しそうなとき**でなければいけません。タイミングがずれると犬はなぜしかられるのかわからないのです。しつけの言葉は、家族で統一した短くて歯切れのよい言葉を使いましょう。例としては、「よし」、「ダメ」、「マテ」、「コイ」、「スワレ」などがあります。



タイミングが大切です

(3) しつけの方法

ほめることと、しかることをはっきり区別しましょう。命令をきいたとき、良いことをしたときは頭や体をなでて、優しくほめてやりましょう。

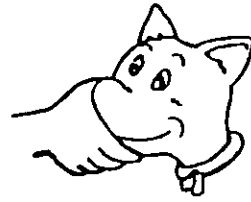
また、しかるときは犬が一瞬「ドキッ」とするように、「イケナイ」とか、「ダメ」といって制止します。犬をたたいたり、名前を呼んでしからないようにしましょう。

(4) 犬の性格としつけ

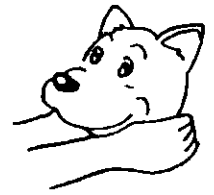
犬にもいろいろな性格があります。優しい犬、荒々しい犬、おく病な犬など、あなたの犬の性格を理解してやるのが大切です。

犬の物覚えが早いかわいさを気にするよりも教え方を変えてみたりして、覚えるまで続けましょう。短期ですぐかんしゃくを起こしたり、その時々で気分が犬に接していたのでは飼い主として失格です。

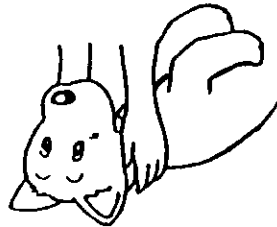
しかり方の例



口をつかむ

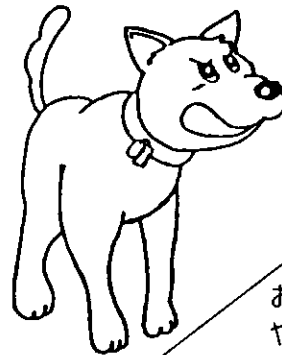


両手で首をつかむ



両手で首をつかんで、ひっくり返す

※どれも犬と目を合わせてしかります。ただし、慣れていない犬ではかみつかれないうち注意しましょう。



荒い犬にはきびしく!



おく病な犬にはやさしく!

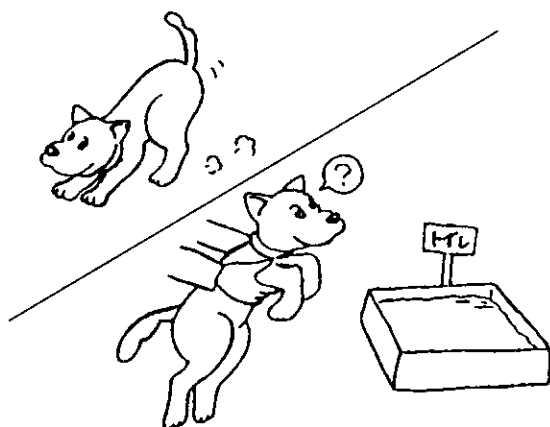
2. いろいろなしつけ

しつけといっても高度な技術が必要なわけではありません。飼い主の責任として、できるだけ努力をしていただきたいものです。次にいくつかの例をあげてみますから参考にしてください。

(1) 排便のしつけ

排便（尿）場所にあらかじめ便（尿）臭のついた土や新聞紙などをおいておきます。

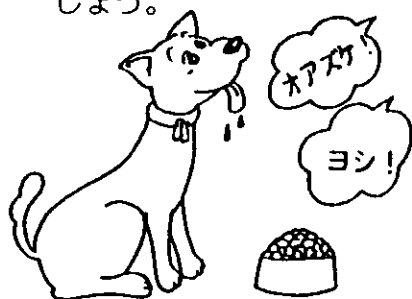
便（尿）意をもよおし、そのしぐさを見せたらすぐに排便（尿）場所へつれていきます。うまくできたときはほめてやりましょう。もしまちがえて他の場所でも、強くしかったりしないで、犬が覚えるまで根気よく教えてやりましょう。



(2) 食事のしつけ

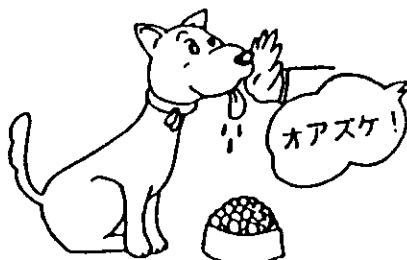
犬の食事は毎日決まった時間に、決まった場所で、決まった食器を使って与えます。外での拾い食いや他人のものをほしがるといったことのないようにしつけましょう。

食事のしつけで大切なものに「オアズケ（マテ）」があります。食事前に必ず待たせ、許可を与えてから初めて食べさせるようにしてください。これは、他のいろいろな行動のしつけにも役立つ大事な課目ですから、行儀の悪い犬にならないよう、しっかりと習慣づけましょう。



犬が待つことを覚えてきたら、次第に言葉だけで服従するようにします。

「オアズケ」を教えましょう



まず犬の鼻先を制止しながら食器を前におきます。最初犬は食器に進もうとしますからすかさず「オアズケ」と犬の鼻先を制します。

犬がじっと待つようになるまで繰り返し犬を制します。

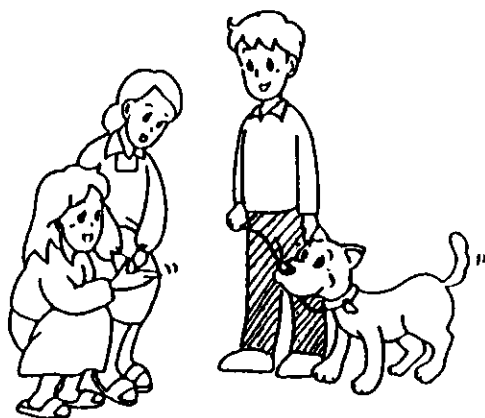


「ヨシ」の言葉で食べ物に誘導して進ませます。



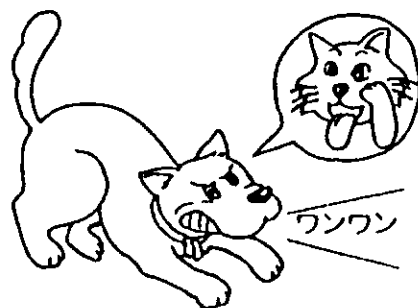
(3) かみぐせをつけないしつけ

気性の荒い犬、神経質な犬ほどかみつくことが多いようです。幼い頃から、気性の荒い犬にはむやみな攻撃的な傾向を助長しないよう、また、神経質な犬には恐怖心を持たせないようにしましょう。そのためにはいろいろな人に接して慣れさせる必要があります。もし犬が攻撃に出たときは強くしかり、また犬が不安を感じているようならなだめて安心させ、人間は友達であることを教えてやりましょう。



(4) むだぼえをさせないしつけ

犬がほえるときはそれなりの理由があります。例えば運動不足、空腹、排便の要求、さびしいなどいろいろと考えられます。ほえる原因を取り除いてやり、それでもやめないときは「ヤメ」といってしかりつけます。



(5) 来訪者に対するしつけ

見知らぬ来訪者があつたとき、犬がほえるのは当然ですが、命令してもやめないときは、犬の口を押さえたりして徹底してやめさせることです。ほえるのをやめたときには、ほめてやりましょう。



(6) その他のしつけ

最後に近隣に対する気くばりや、管理も大切であることを強調しておきます。次にあげることも参考にして、愛犬と共に取り組めるだけの努力をしてみてください。

- 放しぐせをつけない
- むやみにじゃれつかせない
- 庭に穴をほったり、荒らさせない
- 夜なき「マテ」、「コイ」、「スワレ」、「フセ」、「ハウス」など